

題 目 罰による協力の成立可能性 ―リーダーによる罰のインセンティブ構造の検討―

氏 名 小野さくら

指導教員 高橋伸幸

人間社会の大規模な協力関係は、個人の合理的な利益追求が集団全体の不利益を招く「社会的ジレンマ」の構造を内包している。この解決策として、非協力的な成員に対する罰の有効性が実証されている。特に集団成員同士が相互に罰を行使しあう「ピア罰」の有効性に関する研究が多くなされてきた。しかし、罰の行使自体にコストが伴うため、誰もがその負担を避け、他者の罰行使による利益のみを享受しようとする「二次のジレンマ」問題が生じる。この理論的課題に対し、罰行使者がポジティブな評判を獲得し、他成員から利他行動などの自発的な資源提供を引き出すことで、罰のコストを上回る利益を得るという「一般交換からの利益獲得」が、一つの有力な仮説として提唱されてきた。

この仮説に関して様々な実証研究がなされてきたが、一貫した支持は得られていない。罰行使者は「信頼できる」とは評価されるものの、「いい人」とは見なされにくく、安定的な資源提供を受けられるとは限らないことが示されている。これは、罰という行為が対象に不利益を及ぼす攻撃的な側面を持つこと、また、ピア罰における罰行使は「私的な制裁」として、適切な行為とは見なされないことに起因していると考えられる。このように、ピア罰においては、一般交換からの利益獲得説は実証的に支持されておらず、二次のジレンマ問題の解決には至っていない。

こうしたピア罰の限界に対し、近年注目されているのが、集団内でリーダーのみが罰の行使をする「リーダー罰」の制度である。リーダー罰では、二次のジレンマ問題が発生しないうえ、ピア罰と同等の有効性が示されている。それに加えて、現実社会の集団運営システムとの整合性も高いと目されている。しかし、リーダーにとっても罰の行使にコストが伴うことには変わらない。したがって、リーダー罰が安定的に維持されるためには、罰行使リーダーが罰非行使リーダーに比べて高い利益を獲得できる何らかのインセンティブ構造が必要となる。

本研究では、リーダー罰の持続可能性を支えるインセンティブ構造として、以下の二つのメカニズムを提案し、実証的に検討する。一つは、罰行使リーダーの一般交換からの利益獲得説である。ピア罰における罰行使は適切ではない私的制裁とみなされる可能性があったが、リーダーによる罰は職務の遂行として適切な行為と評価され、他成員からの自発的な資

源提供を引き出し得ると考えられる。二つ目は、地位の維持による利益獲得である。ピア罰の罰行使者と同様に、罰行使リーダーも他成員から「信頼できる」と評価され、その信頼がリーダーとしての地位の維持を可能にすると考えられる。実社会において、リーダーという地位に追加的な報酬（役職手当、資源の占有など）が付随する可能性があることから、リーダーが罰を行使することによって信頼され、その地位を維持できるならば、利益を獲得し得ると考えられる。本研究の目的は、これら二つのメカニズムの成立可能性を実証的に検討することである。

これを検討するために、北海道大学の学部生 300 人を対象とした場面想定法質問紙実験を実施した。実験デザインは、罰行使の有無（罰非行使 vs. 罰行使）を参加者内要因、罰（非）行使者のタイプ（ピア vs. リーダー）を参加者間要因とする混合計画とした。さらに、補足的にリーダーの決定方法の違いによる影響を検討するため、リーダー条件については、リーダーの決定方法（ランダム vs. 選出）による相違を操作した。

参加者は、社会的ジレンマ構造を持つ公共財ゲームとそれに続く罰ステージからなる架空の実験状況を描いたシナリオを読み、非協力者に対する罰行使者と、罰非行使者のそれぞれについていくつかの質問に回答した。主要な測定指標は、①罰（非）行使に対する適切性評価、②罰（非）行使者に対する信頼（信頼ゲームにおける預け額）、③一般交換による資源提供（ギビングゲームにおける提供額）、④リーダーとしての再任支持の 4 点である。あわせて、罰（非）行使者に対する評価も測定した。

実験の結果、リーダー条件における罰行使者は罰非行使者と比較してギビングゲームで受ける資源提供額が高かった。また、リーダー条件において、罰行使リーダーは罰非行使リーダーに比べて有意に高くリーダーとして支持された。また、リーダー条件において、罰行使はリーダーの信頼を高めることを介して、リーダーとしての支持を高める正の間接効果が確認された。一方で、罰行使は適切性評価を下げることを介して、ギビングゲームでの資源提供額を下げるという負の間接効果が一部確認された。

以上の結果から、リーダー罰における罰のインセンティブ構造として、一般交換による利益獲得と、地位の維持による利益獲得の二つのメカニズムが成立している可能性が示唆された。また、これらの成立プロセスについて、地位の維持による利益獲得に関しては想定していたプロセスが存在する可能性が示唆されたが、一般交換による利益獲得に関しては依然として不明である。

以上により本研究は、リーダー罰が社会的ジレンマの解決策として、持続可能な仕組みである可能性を示した。